

クオリアの気づきと知識

大石 旦 (Ooishi Hajime)

所属 立正大学大学院

水本正晴はチャーメーズのゾンビ論法に抗して点滅論法を唱えた。しかし、それに対して三浦・柴田 (2011) が反対した。私は、三浦・柴田 (2011) を擁護する立場にいる。それは、チャーメーズの観点からすれば、そうせざるを得ないからである。本発表では、このチャーメーズの観点からの水本批判を行うことになる。だが、この発表の目的はそれ自体にはない。むしろ、その論争が隠してしまった水本とチャーメーズの真の対立点を提示し、チャーメーズの観点からクオリアの気づきと知識についての新しい論点を提出することにある。

自然的に可能でないが、しかし論理的に可能な状況のなかには、同じ物理特性を持つものの、同じ現象特性を持たない状況もある。例えば、現実世界の意識的存在者と物理的には同一であるが、クオリアを持たない者が存在する状況も論理的にはあり得る。この者は、ゾンビと呼ばれている。そして、ゾンビが存在する状況が論理的にあり得るならば、物理主義は間違っているだろう。これがゾンビ論法である。

対して、点滅論法はゾンビが思考可能であることから矛盾が帰結することを明らかにして、ゾンビが思考不可能であることを証明する論法である。この論法は次のような順序で展開される。ゾンビが思考可能であるならば、クオリアが 5 秒ごとに点滅する事も思考可能である。一方で、この点滅は気づかれ得ないかつ気づかれ得る。これは矛盾である。したがって、ゾンビは思考不可能である。

三浦・柴田 (2011) によれば、点滅は気づかれ得ない。クオリアが五秒ごとに点滅するとして、クオリアが点っているときの機能的記憶は我々と同様に「クオリアはずっと点っていた」というものとなる。また、クオリアが点っているときには自然的スーパーヴィーニエンスが成立しているので、現象的記憶も機能的記憶と同じものとなる。それゆえ、クオリアの点滅に気づかれることはない、というのである。

だが、これは水本にとって、受け入れられる事ではない。彼によれば、それはクオリアの本質に反するのである。一人称的観点に立てば、もしクオリアが点滅したならばそれに気づくのは明らかであり、だからこそ、ゾンビの想定は矛盾を孕んでいる、と言うのである。(水本 2011)

だが、この論争は不幸なことに水本とチャーメーズの真の対立点を隠してしまったように思われる。チャーメーズは水本の批判を受け入れないであろう。まずは、チャーメーズが「気づき (aware)」をどう規定していたかを見よう。

気づきを大まかに分析すると、われわれが何らかの情報にアクセスできて、その情報を行動のコントロールに利用できる状態、ということになる。(Chalmers 1996, p. 11, 邦訳 p. 52)

この気づきの規定に対してチャーメーズはクオリアをこの気づきのような心理学的特

性に論理的に付随しないような現象的特性として捉えている。つまり、チャーメーズはクオリアを気づかれることもあれば、そうでないこともあるものとして考えているのであり、だからこそ、それを「ハードプロブレム」と呼んだのである。それゆえ、水本の反論はクオリアをイージープロブレムにしようとするものにほかならない。

だが、それでも私は次の点で、水本に賛成したくなる。すなわち、点滅したとしても、その点滅には気づかれない何かがクオリアであるならば、クオリアは点滅したとしても知られ得ないものになってしまうのではないか、という点で、水本に賛成したくなるのである。実際、気づかれないにも関わらず、知られるなどありそうもない。この気持ちは、おそらく、水本も三浦・柴田も同じであろう。

しかしながら、これが水本とチャーメーズの真の対立点なのである。なぜなら、チャーメーズの観点からすれば、クオリアが点滅したときに、その点滅が気づかれない何かだとしても、その点滅は、知られ得るものだからである。

どのような仕方で知られるのであろうか。それは、主体がクオリアと共に〈面識〉と呼ばれる関係に身を置く事によってである。すなわち、クオリアに対して、それと同じようなものといっさい認識論的に触れ合うことなく、それを持つというのが概念上の可能性としてすらない関係に身を置く事によってである。これは次の通りである。

経験を持つということは自動的に、経験に対しある種親密な認識関係——私達が〈面識 (acquaintance)〉と呼ぶ関係——に身を置くということである。ある主体が、赤い色の経験との認識的接触なしに、赤い色の経験と同様に赤い色の経験をもつことは概念的可能性すらない。経験するということは、経験とこのような形で関係づけられるということである。(Chalmers 1996, 邦訳 p. 249-250)

それゆえ、チャーメーズに従えば、気づかれずに知られることが可能となる。

とはいえ、私は水本に賛成したい気持ちとチャーメーズをより深く理解したい気持ちとで揺れている。そして、この揺れ動きを共有してもらうことがこの発表のもう一つの目的である。

参考文献

- [1] Chalmers, David J. (1996), *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory* 林一訳『意識する心』)
- [2] 水本正晴(2006)「ゾンビの可能性」『科学哲学』 39-1
- [3] 水本正晴(2010)「点滅論法再訪」『科学哲学』 43-1
- [4] 水本正晴(2011)「死亡診断書を読まないゾンビたち」
- [5] 三浦俊彦(2011)「クオリアの点滅」『論理パラドクシカ』二見書房
- [6] 三浦俊彦・柴田正良(2011)「「点滅論法」の誤謬について」『科学哲学』 44-1
- [7] 三浦俊彦(2014)「多義性の誤謬としての点滅論法」2014年 日本科学哲学会 第47回大会 ワークショップ「ゾンビと点滅論法と哲学的論争」
- [8] 三浦俊彦 2008 「人間原理的クオリア論」柴田正良・長滝祥司・美濃正編『感情とクオリアの謎』昭和堂